

## タイ語の関係節構文\*

高橋清子

### 1. はじめに

日本語の関係節（連体修飾節）に関する論考は数多い。生成文法の枠組みでは 1970 年代に井上(1976)によって日本語の関係節に関する詳細な分析が提示された。井上(1976: 163-164)によると、名詞句（埋め込み文を含む複合名詞句）の内部構造に含まれる埋め込み文には以下の3種類（①関係節(1), ②同格節(2), (3), ③名詞化構造(4)）があるという。

(1) 宇宙中継で放映された大会の実況が今日の話題になった。

「関係節」

(2) 大会の実況が宇宙中継で放映されたとのニュースが伝わった。

「同格節」

(3) 議長は会議が定刻に始められなかった事実を重視している。

「同格節」

(4) 大会の実況が宇宙中継で放映されたことが報告された。

「名詞化構造」

関係節が同格節と名詞化構造から区別されるのは、関係節には「基底構造に主名詞と同一の名詞句を仮定できる」という特色があるからであると井上(1976)は説明する。言い換えれば、関係節によって修飾される主名詞と同一の名詞句が関係節（埋め込み文）の中で主語や目

---

\* 本稿は神田外語大学言語科学研究センター10周年言語学研究会『70年代「日本語の生成文法研究」再認識—久野暉先生と井上和子先生を囲んで—』（2010年7月1-2日、神田外語大学、千葉）で発表した内容に加筆修正を施しまとめ直したものである。同研究会の参加者の方々から有益な指摘や批評をいただいた。特に長谷川信子氏からは執筆の過程で多くの貴重なコメントをいただいた。感謝申し上げたい。本稿の誤りや不備はすべて筆者に帰することは言うまでもない。

的語などとしての文法上の役割を果たしていると解釈されるということである。例えば(1)の主名詞「大会の実況」は関係節の中で述語「放映された」の主語の役割を果たしていると解釈され、主名詞と同一の名詞句を含む基底文「大会の実況が宇宙中継で放映された」を仮定できるという。

本稿の分析対象はタイ語<sup>1</sup>の関係節である。日本語の関係節構文は関係節化形式(関係節を形成するときに使われる形式)を含まないが、タイ語の関係節構文には関係節化形式 *thîi*, *sûŋ*, *ʔan*<sup>2</sup>を含むものと含まないものがある。現代タイ語の関係節構文は関係節化形式の種類によって以下のように大きく3種類(①関係節化形式 *thîi* を含む *thîi* 関係節構文(5), ②関係節化形式 *sûŋ* を含む *sûŋ* 関係節構文(6), ③関係節化形式を含まない裸の関係節構文(7))に分類できる。

---

<sup>1</sup> タイ語は、声調言語、孤立語、「主語、動詞、目的語」、「被修飾語、修飾語」という基本語順を持つ言語、複数の動詞句が接続詞を介さずに連続することを許す動詞(句)連続言語、統語上の概念(主語など)よりも情報構造上の概念(主題など)のほうが優位に働いて文章が構成されていく主題卓越言語、などと分類されることが多いが、印欧語研究者には馴染みの薄い「理解し難い」特徴を数多く持っており、それらの特徴にも留意すべきである。いくつか例を挙げれば、内容語と機能語は連続体を成し両者を区別することが難しいこと、文法範疇概念の特定化が必須ではない(文法範疇の必須標識がない)こと、必須項はなく、動詞と名詞句の結びつきはかなり自由で、動詞の項(主語、目的語)と非項(斜格名詞句、補語、付属語など)を区別し難いこと、動詞が名詞句を項として支配する階層構造を成す文という単位を規定できないこと、などである。

<sup>2</sup> 関係節化形式 *ʔan* は現代タイ語において口語的な表現には使われず、文語的な表現にしか使われない。例えば、*ʔan* を含む例(i)がおかしいのは、*ʔan* が使えるほどの堅い内容の表現ではないからである。

(i) ? *khâaw*            *ʔan*            *nĭaw*  
米                    関係            粘る  
(意図する意味) 粘る米

また、関係節化形式 *ʔan* は類別詞と共起しない。*ʔan* は現代では関係節化形式よりも類別詞として使われる頻度が高いからであろう。このように *ʔan* の関係節化形式としての用法には制約があり、本稿では *ʔan* 関係節構文については考察しない。

- (5) khâaw      thîi      nǎaw      「thîi 関係節構文」  
米              関係 粘る  
粘る米 (米, 粘るもの)
- (6) khâaw      suŋ      nǎaw      「suŋ 関係節構文」  
米              関係 粘る  
粘る米
- (7) khâaw      Ø      nǎaw      「裸の関係節構文」  
米                      粘る  
粘る米 (米は粘る/もち米) <sup>3</sup>

本稿では(5)~(7)のような 3 種類の関係節構文を取り上げ, タイ語話者がそれらをどのように使い分けているのかを探っていく。先行研究の中には, タイ語の典型的関係節は thîi 関係節であり, thîi 関係節は制限的な(主名詞句の指示領域を制限し, 下位集合を特定する)関係節であると説明するものがある。また 18~20 世紀のタイ語の通時的言語資料を調べた Prompapakorn (1996)は, 関係節化形式の使用頻度がその時期に増大したこと, 中でも特に thîi の使用頻度が顕著に増大

---

<sup>3</sup> (7)の「khâaw nǎaw」は, 主名詞句「khâaw ‘米’」を関係節「nǎaw ‘粘る’」が修飾し「粘る米」という関係節構文を成立させていると見ることもできるが, 主語名詞句/主題名詞句「khâaw ‘米’」と述語動詞句「nǎaw ‘粘る’」が結びつき「米は粘る」という意味を表しているとも見ることもできる。さらに, 「khâaw nǎaw」は「もち米」という意味を表す複合語(慣用表現)としても定着している表現である。

関係節化形式を含む(5), (6)は関係節構文であることが形の上からはっきりわかるのに対し, 関係節化形式を含まない(7)は文脈がなければ関係節構文であるのかどうかわからない。その理由として, タイ語では動詞に定性の形態的区別(定動詞・不定動詞の区別)がないこと, 連体修飾形式「被修飾語の名詞句+修飾語の動詞句」と叙述形式「主語の名詞句+述語の動詞句」の語順や音調が変わらないこと, 形態論, 統語論の観点から分類される形容詞という語類がないこと(属性や状態などを表す語は動詞の下位分類とみなされること), 句や節や文などの統語単位があいまいで句読点をつけられないこと, 等々を挙げることができる。

したことを発見した。使用頻度の点から言えば、確かに現代タイ語の典型的関係節は *thîi* 関係節であると言ってよいように思える。しかし本稿の分析結果から筆者は以下の結論に至った。①タイ語の典型的関係節は非制限的な (情報付加の機能を持つ) *sûŋ* 関係節 (6) である。②非制限的でも制限的でもあり得る *thîi* 関係節 (5) は、構造的にはむしろ井上 (1976) の言う同格節 (2), (3) や名詞化構造 (4) に近く、いわば周辺的關係節である。③定形になり得ない (話し手のモダリティ解釈やアスペクト解釈を含み得ない) 裸の関係節 (7) は複合名詞句に限りなく近い。

本稿の目的は、タイ語の関係節構文に関する先行研究を概観し、タイ語の主要な 3 種類の関係節構文の意味機能の異同をより基本的な分析概念を用いて明示的に説明することである。まず現代タイ語の関係節構文の特徴を具体的に見ていく (第 2 節)。次にタイ語の関係節化形式の多義性、多機能性について説明し (第 3 節)、これまでのタイ語の関係節構文の分類を紹介する (第 4 節)。そして新たな分析を提示し (第 5 節)、最後に本稿の分析によって得られた仮説をまとめる (第 6 節)。

## 2. タイ語の関係節構文の特徴

タイ語の連体修飾の語順は「名詞句 (被修飾語) + 修飾語」である。関係節構文は「主名詞句 + 関係節」の語順となる。関係節構文に生起可能な構成素の生起順序を (8) に示した。まず主名詞句、次に類別詞<sup>4</sup>,

---

<sup>4</sup> タイ語の関係節構文では類別詞が主名詞句と関係節の間に生起し得る。類別詞があると、主名詞句の指示物はより具体的な個体として解釈される。

タイ語の類別詞は類別化 (classification) という基本的機能を持つ他、数量詞と共起したときは個別化 (individualization) の機能を持ち、指示詞と共起したときは単一標示 (singulative) の機能を持ち、形容詞 (属性や性質などの静的状態を表す動詞、いわゆる状態動詞) と共起したときは定標示 (definiteness) の

その次に関係節化形式, 最後に関係節である。(9)の関係節構文を例にとると, まず主名詞句「dèk ‘子供’」, 次に類別詞「khon」, その次に関係節化形式「thîi / sūŋ」, 最後に関係節「maa sǎay ‘遅刻して来る’」

---

機能を持ち, また, 指示詞あるいは形容詞と共起したときには対比標示 (contrast) の機能も持つとされる (Bisang (2009: 40-43))。

- (i) khâaw mét rii  
米 類別 先細りの形だ  
先細りの形をした米
- (ii) ? khâaw rii  
米 先細りの形だ  
(意図する意味) 先細りの形をした米

粒状の形態を持つものに適用される類別詞「mét」を含む(i)では, 類別詞によって米粒としての米が指示され, その米粒が先細りの形をしているのだということがわかる。一方, 類別詞を含まない(ii)はタイ語話者にとって容認できない表現である。なぜならタイ人にとって「khâaw ‘米’」とは輪郭のはっきりした個体ではなく, 輪郭のはっきりしない物質なので, 類別詞によって粒として具体的に指示されない限り, 形状について修飾することができないからである。ただしこの説明は, (i)(ii)のように内部構造が単純な複合名詞句や裸の関係節構文に適用されるものであることに注意されたい。(iii)のように関係節化形式が主名詞句の後ろに生起して関係節を形成する場合は, 修飾されるのが「米」であり修飾内容が「米粒の形状」についてのものであったとしても, 類別詞「mét」は生起しなくともよい。

- (iii) khâaw thîi rii  
米 関係 先細りの形だ  
先細りの形をした米 (米, 先細りの形をしたもの)

第5節で論じるように, thîi 関係節構文を構成する主名詞句と関係節の関係は「特定名詞句+特筆的内容を添える名詞句」という並列関係であり, sūŋ 関係節構文を構成する主名詞句と関係節の関係は「主題名詞句+評言補文節」という弱い従属関係である, と筆者は考える。それらの関係は, 複合名詞句や裸の関係節構文を構成する構成素同士の関係とは異なり, ある程度独立した構成素同士の関係であるから, 主名詞句の後ろに類別詞が生起するかどうか (主名詞句の指示物がより具体的な個体として指示されるかどうか) によってその関係性が左右されることはないといえる。

Bisang (2009)が指摘するように類別詞は形容詞 (状態動詞) と共起すれば定標示の機能を持つが, 類別詞を含む関係節構文の主名詞句が常に定とは言えない。5.4 節で論じるように, 類別詞を含むと含まざるとにかかわらず thîi 関係節構文の主名詞句は定の場合も不定の場合もある。本脚注の冒頭で述べたように, 類別詞が使われた場合は描写されるものの具体度が増すのであって, その具体度は定性 (第5節) とは直接関係がない。

という順番である。<sup>5</sup>

(8) 主名詞句 + {∅ / 類別詞} + {∅ / thîi / sūŋ} + 関係節 [...]

(9) dèk (khon) (thîi / sūŋ) maa sǎay  
 子供 (類別) (関係) 来る 遅い  
 遅れて来た子供

Keenan (1985)や Lehmann (1986)による類型論的分類では, タイ語の関係節構文は, 関係節の外に主名詞句があり主名詞句の後ろに関係節が置かれるタイプ(external-head, postnominal type)に分類される。関係節の中に主名詞句を指示する形式が入らない空所方略(gap strategy)が採用されることが多いが, 主名詞句を指示する代名詞が入る代名詞残存方略(pronoun retention strategy)が採用されることもある。例えば, (10)の関係節には主名詞句「náŋsǔw ‘本’」を指す代名詞「man ‘それ’」が含まれている(代名詞残存方略)。しかし(11)のように代名詞を含まないことのほうが多い(空所方略)。

(10) náŋsǔw thîi cèək man nay ŋaan  
 本 関係 配る それ 中 催し  
 催しの中で(それを)配る本

<sup>5</sup> ただし(i)のように類別詞((i)の場合は人間に適用される「khon」)が主名詞句である場合もあり, その場合は「類別詞(=主名詞句) + {∅ / thîi / sūŋ} + 関係節[...]」という語順になる。

(i) khon (thîi / sūŋ) maa sǎay  
 類別 (関係) 来る 遅い  
 遅れて来た子供

(11) náŋsǔw      thîi      cèɛk      Ø      nay      ŋaan

本                      関係 配る                      中                      催し

催しの中で配る本

関係節はこれまで言語類型論の分野で広く研究され, Keenan and Comrie (1977)によって提案された名詞句接近度階層 (noun phrase accessibility hierarchy) という仮説が有名であるが, Yaowapat and Prasithrathsint (2009)はその仮説に基づき, タイ語における関係節化を許す名詞句の意味役割, 文法役割 (格) について調査した。その結果, タイ語では, 名詞句接近度階層の最上位に位置するもっとも関係節化されやすい主格名詞句 (主語) から, 最下位に位置するもっとも関係節化されにくい比較対象物格名詞句まで, すべての格の名詞句が関係節化され得ると結論付けた。<sup>6</sup>

### 3. タイ語の関係節化形式の多義性, 多機能性

thîi と sǔwŋ は多義語, 多機能語である。関係節構文の中では関係節化形式として機能するが, 他の構文の中では別の意味機能を担う。本節ではそうした thîi と sǔwŋ の多義性, 多機能性について調べ, thîi と sǔwŋ の性格の違いについて考察する。まず thîi の多義性, 多機能性について。thîi の文法化経路については Bisang (1996), Singnoi (2000), Kullavanijaya (2008)が異なる説を提示しているが, いずれの説も名詞「thîi ‘場所’」が関係節化形式 thîi の起源語であるとしている。(12) ~ (19)に示すように thîi は典型的な多義語, 多機能語である。<sup>7</sup>

<sup>6</sup> タイ語の関係節構文の主名詞句の格に関しては, Yaowapat and Prasithrathsint (2009)より前に Sornhiran (1978: 144-145)が, 主格, 対格以外に所有者格や場所格などの斜格も容認されることを指摘した。

<sup>7</sup> (12)では名詞「thîi ‘場所’」が名詞「din ‘土’」によって修飾され「土地」

(12) thîi    din

場所    土

土地

(13) thîi                    prú ksăa

ところ                    相談する

相談役

(14) dèk    dèk    thîi    bâan

子供    子供    前置    家

家の子供たち

(15) nám    chaa    sǒɔŋ    thîi

水        茶        2        類別

2人前のお茶

(16) ru̯aŋ    thîi                    kháw    mây    thǎaŋ

話        補文化                    彼        否定    反論する

彼が反論しないという話

---

という複合名詞（慣用表現）を形成している。(13)では (Bisang (1993)が類名詞(class noun)と呼ぶ) 抽象レベルの意味を表す名詞「thîi ‘ところ’」が動詞「prú ksăa ‘相談する’」によって修飾され「相談役」という複合名詞（慣用表現）を形成している。(14)では名詞句「dèk dèk ‘子供たち’」が前置詞「thîi ‘～にて’」を含む前置詞句「thîi bâan ‘家にて’」によって修飾され「家の子供たち」という名詞句を形成している。(15)では名詞句「nám chaa ‘お茶’」が類別詞「thîi ‘～人前’」を含む数量詞句「sǒɔŋ thîi ‘2人前’」によって修飾され「2人前のお茶」という名詞句を形成している。(16)では名詞「ru̯aŋ ‘話’」が補文化形式(補文を形成するときに使われる形式) thîi に導かれた補文「thîi kháw mây thǎaŋ ‘彼が反論しない’」によって修飾され「彼が反論しないという話」という名詞句を形成している。(17)では補文「thîi kháw mây thǎaŋ ‘彼が反論しない’」が動詞「dii cay ‘嬉しい’」の補語として機能し「彼が反論しなくて嬉しい」という意味を表している。(18)では thîi が日本語のいわゆる形式名詞(「の, こと」など)に似た名詞化形式(名詞句を形成するときに使われる形式)として機能し「thîi kháw mây thǎaŋ ‘彼が反論しないこと’」という名詞句を形成している。(19)は関係節化形式 thîi を含む関係節構文である。これらの例の中で thîi が súŋ と交代可能であるのは(19)の thîi (関係節化形式) だけである。



(17) dii cay      thîi      kháw mây      thǎŋ  
嬉しい      補文化      彼      否定 反論する

彼が反論しなくて嬉しい

(18) thîi      kháw mây      thǎŋ  
名詞化      彼      否定 反論する

彼が反論しないこと

(19) muəŋ      thîi      chán      yùu  
街      関係 私      位置する

私が住む街

実は, (19)のような関係節構文に使われる thîi の名称は先行研究で一致しているわけではない。本稿では便宜的に関係節化形式と呼ぶことにしたが, Bisang (1996)と Kullavanijaya (2008)は関係節標識 (relative marker, relative clause marker)と呼び, Singnoi (2000)は関係代名詞 (relative pronoun)と呼んでいる。これらの呼び名から, 後者は thîi を完全な関係節標識であるとは見ていないことがわかる。

次に関係節化形式 sûŋ の多機能性について。sûŋ にはかつて対格を標示する機能があり, 現代タイ語でも文語的表現に限り対格標識 sûŋ は使われている。Kitsombat (1981)によると, 20世紀まで thîi と同様の名詞化形式(18)の用法があったというが, 現代では一般に sûŋ は名詞化形式として使用されない。また sûŋ には補文化形式(16), (17)の機能もない。したがって現代タイ語の sûŋ の機能は関係節化形式と対格標識の2つである。しかし対格標識としての使用は非常に稀で, 関係節化形式にほぼ特化しているといえる。<sup>8</sup>

<sup>8</sup> その他, 「sûŋ kan léʔ kan ‘お互いに’」, 「nam maa sûŋ + 結果状態を表す名詞句 ‘～をもたらず’」, 「hây dâŋ {maa/pay} sûŋ + 結果状態を表す名詞句

thîi と sūŋ の用法を比べると，両者の大きな相違点は名詞的用法の有無にあることがわかる。現代タイ語において，sūŋ は名詞的用法を失っているのに対し，thîi は今なお名詞的用法（(12)のような実質名詞の用法，(13)のような類名詞の用法，(15)のような類別詞の用法など）を保持している。

#### 4. タイ語の関係節構文の分類

本節ではこれまでタイ語の関係節構文がどのように分類されてきたのか，その分類のあり方を紹介し，それらの分類に対する筆者の見解を簡潔に述べる（見解の根拠は次節で述べる）。表 1 はこれまで提案されてきたタイ語の関係節構文の分類一覧である。

表 1：タイ語の関係節構文の分類

|                     |   |
|---------------------|---|
| A：関係節構文らしさの程度       | 「関係節化形式を含む関係節構文 (overtly marked relative clause)」 vs. 「裸の関係節構文 (bare relative clause)」 (Singnoi (2000))   |
| B：関係節化形式の種類         | 「関係節標識 (relativizer, linker)」 (チャウエンギツジワニッシュユ (2002), Kullavanijaya (2006), Yaowapat and Prasithrathsint (2009)) , 「補文標識 (complementizer)」 (Sornhiran (1978)) vs. 「関係代名詞 (relative pronoun)」 (Singnoi (2000)) |
| C：主名詞句の指示領域を制限するか否か | 「thîi 関係節は制限 (restrictive) 関係節」 vs. 「sūŋ 関係節は非制限 (non-restrictive) 関係節」 (Ekniyom (1971), Kullavanijaya (2006), Sindhvananda (1970), Singnoi (2000))   |
| D：特徴付けが個人的か否か       | 「thîi 関係節は個人的特徴付け」 vs. 「裸の関係節は一般的特徴付け」 (Kuno and Wongkhomthong (1981))  |

‘～をもたらすように’ など，sūŋ を含む慣用表現はいくつかある。また，関係節化形式 sūŋ が導く関係節によって修飾されるものは前置の名詞句だけに限らず，前置の節や先行談話全体の場合もある。

A の分類は Singnoi (2000)によるものである。彼女はタイ語の関係節構文を関係節構文らしさの程度によって2種類に大きく分けた。より関係節構文らしい関係節化形式を含む関係節構文(5), (6)と、より複合名詞句らしい裸の関係節構文(7)である。第1節の(7)「khâaw nīaw ‘粘る米, もち米’」からもわかるように、裸の関係節構文と複合名詞句との間に明瞭な区分はなく、両者は連続しているというのが彼女の主張である。筆者も同意見である。<sup>9</sup>

B は関係節化形式の分類である。thîi, sūŋ を指示機能のない(名詞性を失った)関係節標識あるいは補文標識であると考えられる研究者もいれば、一方で、指示機能を残した(名詞性を失っていない)関係代名詞であると考えられる研究者もいる。筆者は、sūŋ は完全な関係節標識だが thîi は今なお名詞性を失っていないと考える。

C の「制限」対「非制限」という分類は言語学者の間ではおそらくもっとも有名な関係節の2分類である。制限関係節とは、例えば「焼いた魚」の「焼いた」のように、主名詞句の指示領域を制限し、下位集合を特定する役割を果たす関係節である。非制限関係節とは、例えば「すぐにかつとなる彼の性格」の「すぐにかつとなる」のように、主名詞句指示物に対する情報付加の役割を果たす関係節である。この分類基準を使ってタイ語の関係節構文を分類し、thîi 関係節は制限関係節であり、sūŋ 関係節は非制限関係節であると説明するタイ語研究

---

<sup>9</sup> Savetamalya (1996: 642-645)は、裸の関係節構文とみなされることが多い「khon khàp rôt ‘人, 運転する, 車: 車を運転する人, 車の運転手’」のような表現は裸の関係節構文ではなく、慣用的職業概念を表す複合名詞句であると主張する。その根拠として、統語的な振る舞いに関する制約が強い(「毎日車を運転する」といった副詞修飾や「車を運転し楽曲を聴く」といった動詞句の接続が不可能である)ことを指摘する。このような複雑な複合名詞句は、「khon rák rôt ‘人, 愛する, 車: 車を愛する人’」のような裸の関係節構文と「khon dii ‘人, よい: 善人’」のような単純な複合名詞句の間をつなぐ両範疇の中間タイプの表現といえよう。

者も少なくない。しかし筆者は、「制限」対「非制限」という区別はタイ語の主要な3種類の関係節構文の弁別特徴にはならないと考える。

DはKuno and Wongkhomthong (1981)の分類である。suŋ 関係節については言及がないものの、thîi 関係節は「個人的特徴付け」に使われ、裸の関係節は「一般的特徴付け」に使われるという、2つの関係節の対比的特徴を豊富な具体例をもとに実証的に論じている。例えば、thîi 関係節を含む(20)は容認されるが、裸の関係節を含む(21)は容認されないという。

- |      |                          |               |             |       |
|------|--------------------------|---------------|-------------|-------|
| (20) | phǒm kamləŋ cà?          | khǐan nán̄sǔw | <u>thîi</u> | sanùk |
|      | 私 今にも～する                 | 書く 本          | 関係          | 面白い   |
|      | 私は面白い本を書こうとしている          |               |             |       |
| (21) | *phǒm kamləŋ cà?         | khǐan nán̄sǔw | ∅           | sanùk |
|      | 私 今にも～する                 | 書く 本          |             | 面白い   |
|      | (意図する意味) 私は面白い本を書こうとしている |               |             |       |

Kuno and Wongkhomthong (1981)の考えでは、(20)の thîi 関係節によって修飾された「本」は話し手「私」が個人的に「面白い」と判断する本である。自分が面白いと思える本を書こうとすることは当然可能なので、(20)は容認される。一方、(21)の裸の関係節によって修飾された「本」は当該文化の中で一般的に「面白い」と判断される本である。しかし一般の人々にとって面白い本になるかどうかは書こうと思いついた時点ではわからない。(21)が容認されないのはそのような事情による。

thîi 関係節による個人的特徴付けとは、話し手が特定のな実在物と

して認定した上で、その顕著な特徴に言及することであると言い換えてよいだろう。thîi 関係節には Ionin (2006)が言うところの「話し手が意図した特定の指示物の顕著な特徴 (特筆性(noteworthiness))」を標示する機能があるといえる。一方、裸の関係節による一般的特徴付けという概念は、複合名詞句によって表される高度に慣用化された概念と基本的に変わらないであろうと筆者は考える。つまり裸の関係節構文によって表される事柄は、よく目にするありきたりの事柄であり、抽象レベルの類型的概念として定着しているものである。<sup>10</sup>

## 5. 新たな分析

本節では、表 2 に挙げた 5 つの分析概念を導入し、前節で述べた筆者の見解の根拠を明らかにする。

---

<sup>10</sup> 三上(1999)は形容詞 (属性や性質などを表す状態動詞) を含む場合の thîi 関係節構文の意味と裸の関係節構文/複合名詞句の意味を比較し、後者について以下のような見解を述べている。「thîi がない場合は (修飾要素の) 形容詞は名詞の分類作用を果たし、表現全体が名詞の類, タイプとして理解される。[...] khon dii [人, よい (善人)] をはじめ, dèk dii [子供, よい (よい子)], khon con [人, 貧しい (貧者) などの thîi を含まない表現] はカテゴリーとして認知された表現である。」(三上(1999: 212-213))

Kuno and Wongkhomthong (1981)も、裸の関係節構文の特徴は“the public’s evaluation” (ibid.: 223) (「世間一般の評価」(筆者訳)) あるいは“the concept of a ‘well-established set that is pragmatically relevant’ ”(ibid.: 225) (「『語用論的に関連性を持つ, 定着したひとそろいの類』という概念」(筆者訳)) を表すことであるとする。

表 2 : 本稿でタイ語の関係節構文の分類に用いる分析概念

|   |   |
|---|---|
| ① | 関係節の「断定性」(assertiveness) (Croft (2001: 360)), 「定形性」(finiteness) (Givón (1990: 852-864), Bisang (2007: 118)), 「文としての性質の強さ弱さ, Modality の存否・濃淡」(寺村(1992: 191))                           |
| ② | 関係節の主節への「統合度」(the degree of integration) (Givón (1990: 514-561), Hopper and Traugott (1993: 168-177), Fox and Thompson (2007))  |
| ③ | 関係節化形式の「指示機能」, 「名詞性」(referentiality, existential qualification) (Givón (1973: 120))   |
| ④ | 主名詞句の「同定性」(identification, the coordination of reference) (Langacker (2009: 180)), 「定性」(definiteness) (Chafe (1976: 39), Givón (1978: 296), Ionin (2006: 207), Langacker (2009: 177)) |
| ⑤ | 主名詞句の「特定性」(specificity) (Lyons (1999: 59), Inonin (2006: 187))  |

①「関係節の断定性, 定形性」とは, 関係節の文らしさの度合いを問う概念である。寺村(1992: 191)の言葉を借りれば「文としての性質の強さ弱さ, Modality の存否・濃淡」ということである。前節で紹介した A「関係節構文らしさの程度による分類」の基盤はこの分析概念であると考えられる。

②「関係節の主節への統合度」は「関係節の断定性, 定形性」と相反する関係にある概念である。「関係節の断定性, 定形性」が関係節の自立度(主名詞句との結びつきの弱さ)を問うものであるとすれば, 「関係節の主節への統合度」は関係節の依存度(主名詞句との結びつきの強さ)を問うものである。すなわち①と②は同じ基準(関係節と主節の関係性, お互いの結びつきの程度)から見た正反対の値(結びつきが弱い, 強い)を問題にした対の概念である。したがってこの分析概念もまた A の分類に関わっている。

③「関係節化形式の指示機能, 名詞性」とは, 関係節化形式に指示

機能という名詞的性質がどれだけ残っているのか、その程度のことである。前節で紹介した B「関係節化形式の種類による分類」の基盤はこの分析概念であると考えられる。

④「主名詞句の同定性，定性」とは，話し手のみならず，聞き手も主名詞句の指示物を同定できる，つまり話し手と聞き手がお互い同じ指示物を同定する，その可能性の程度ということである。主名詞句の定性が高ければ高いほど，その主名詞句は前提とされやすく，より強い主題性を持ちやすいといえることができる。前節で紹介した C「主名詞句の指示領域を制限するか否かを基準とする分類」にこの分析概念が関わっていると考えられる。

⑤「主名詞句の特定性」とは，主名詞句で表されるものを話し手が特定のな実在物として認定し指示しているかどうかを問題とする概念である。前節で紹介した D「関係節による特徴付けが個人的か否かを基準とする分類」にこの分析概念が関わっていると考えられる。

以下の小節では，①～⑤それぞれの分析概念を取り上げ，それらの概念を用いることによってタイ語の主要な 3 種類の関係節構文の意味機能がどのように記述され得るのかを論じる。

### 5.1. 関係節の断定性，定形性

Givón (1990)や Bisang (2007)の考えに従えば，タイ語の節の定形性はアスペクト概念やモダリティ概念を明示化できるかどうかによって見分けることができるといえる。文法範疇のパラダイムが成立しておらず，明示化が必須とされる文法標識のないタイ語において，定形性という文法概念もまた必須標識はないのだが，「アスペクト標識やモダリティ標識が生起し得ない節は（断定性の程度が低い）非定形で

ある」と考えることが可能である。断定性が高く，文らしさの度合いが高い節には，アスペクト標識やモダリティ標識が無理なく生起する（ただし必ず生起するとは限らない）。

(22) dèk thîi cà? maa sǎay phrûŋ níi  
子供 非現実 来る 遅い 明日  
明日遅れて来る子供（子供，明日遅れて来るもの）

(23) dèk sũŋ cà? maa sǎay phrûŋ níi  
子供 非現実 来る 遅い 明日  
明日遅れて来る子供

(24) #dèk Ø cà? maa sǎay phrûŋ níi  
子供 非現実 来る 遅い 明日  
（意図する意味）明日遅れて来る子供<sup>11</sup>

(22)の thîi 関係節と(23)の sũŋ 関係節にはモダリティ標識の一種である非現実性標識 cà? が生起している。つまり thîi 関係節と sũŋ 関係節は定形になり得る，言い換えれば，文らしくなり得るということである。それらは1つの言語単位としての自立度が高く，主名詞句への依存度が弱いと言える。一方，(24)の裸の関係節に cà? は生起できない。裸の関係節は常に非定形であり，話し手によるアスペクト解釈やモダリティ解釈を明示化できないということである。その点で，裸の関係節構文は非定形の構成素で成り立つ複合名詞句に近い。裸の関係節と複合名詞句構成素は1つの言語単位としての自立度が低く，主名詞句への依存度が高いと言える。

<sup>11</sup> (24)は関係節構文ではなく，「子供は明日遅れて来る」という意味の叙述形式として理解される。



## 5.2. 関係節の主節への統合度

Fox and Thompson (2007: 293)が指摘するように「主節と関係節の統合度が強まり単一の節に近づけば近づくほど、関係節化形式の生起が難しくなる」ということからすると、関係節化形式を含む *thîi* 関係節構文と *sûŋ* 関係節構文は、裸の関係節構文よりも、主節と関係節の統合度が低いと言える。しかし *thîi* 関係節の主節への統合度と *sûŋ* 関係節の主節への統合度には違いが見られる。(25)と(26), (27)と(28)の対照例を見てほしい。

(25) *lăay*            *lêm*    *thîi diaw*                    *thîi*    *sanùk*

多くの            類別 まったくもって    関係    面白い

面白いまったくもってたくさんの本 (まったくもってたくさん  
の本, 面白いもの)

(26) \**lăay*            *lêm*    *thîi diaw*                    *sûŋ*    *sanùk*

多くの            類別 まったくもって    関係    面白い

(意図する意味) 面白いまったくもってたくさんの本

(27) *thəə*            *nîi ʔeen*            *thîi*    *bòɔk*                    *kháw*<sup>12</sup>

あなた            こそ                    関係    告げる                    彼

彼に告げたあなた (あなたこそ, 彼に告げたもの)

(28) \**thəə*            *nîi ʔeen*            *sûŋ*    *bòɔk*                    *kháw*

あなた            こそ                    関係    告げる                    彼

(意図する意味) 彼に告げたあなた

<sup>12</sup> (27)のように主名詞句の後ろに強調修飾語句が挿入された関係節構文をチャウエンギジワニッシュ(2000)は「提題的連体構文」と呼び、非制限的修飾(情報付加)機能を持つ関係節構文の1種として分類している(注20)。

(25), (27)の *thîi* 関係節構文では主名詞句と関係節の間に強調修飾語句 ((25)では副詞「*~ thii diaw* ‘まったくもって~’」, (27)では副助詞「*~ nîi ?eeŋ* ‘~こそ’) がそれぞれ生起している。一方, (26), (28)の *sûŋ* 関係節構文ではその位置にそのような強調修飾語句を入れることはできない。これらの例から読み取れることは, 関係節と主名詞句との結びつきの強さの違いである。*sûŋ* 関係節は主名詞句に対して従属関係にあるのに対し, *thîi* 関係節は主名詞句に対して並列関係にあると言ってよいのではないかと筆者は考える。<sup>13</sup>すなわち, *sûŋ* 関係節と裸の関係節が主名詞句との間に強調修飾語句の挿入を許さないのは, 自立度が低く (従属的で) 主名詞句との結びつきが強いからであり, 一方 *thîi* 関係節が主名詞句との間に強調修飾語句の挿入を許すのは, 自立度が高く (並列的で) 主名詞句とそれほど強く結びついているわけではないからである。

### 5.3. 関係節化形式の指示機能, 名詞性

主名詞句と *thîi* 関係節が並列の関係にあると捉えられ得るのは, つまるところ, *thîi* が今なお名詞性を保持しているからだと筆者は考える。第3節で見たように *thîi* には名詞化形式(18)の用法がある。したがって *thîi* 関係節は名詞化形式 *thîi* とその補文から成る名詞句であり, 主名詞句とその名詞句は並列の関係 (いわば同格関係) にあると見る

---

<sup>13</sup> Shibatani (2009)も, 本稿の議論とは異なる文脈においてではあるが, 次のように関係節の非従属的性格に言及している。“[W]hat has been identified as relative clauses/sentences are in fact nominalized entities, lacking some crucial properties of both full clauses and sentences. [...] these nominalized forms are neither syntactically nor semantically subordinate to, or dependent on, the nominal head they modify.” (Shibatani (2009: 163)) (「これまで関係節, 関係文と同定されてきたものは, 実際は, 名詞化されたものであり, 完全な節, 完全な文としての何らかの重要な特質を失っている。[...]これらの名詞化形式は, それが修飾する名詞的主要部に, 統語論的にも意味論的にも従属していない, あるいは統語論的にも意味論的にも依存していない。」(筆者訳))

ことが可能である。タイ語話者が *thîi* 関係節を使うのは、その主名詞句と並列的な名詞句（すなわち *thîi* 関係節）によって補足的に、主名詞句の指示物に対する話し手の主観的な説明を付け加えたい場合だと言えるのではないだろうか。

- (29) *khâaw*            *thîi*    *nǎaw*  
      米                関係 粘る  
      粘る米（米，粘るもの）

例えば(29) (= (1)) では話し手は主名詞句で表されている特定の米を（「特定性」については 5.5 節を参照せよ）自らの観点から「*nǎaw* ‘粘る’」と描写し、主名詞句と並列的な同格の名詞句「*thîi nǎaw* ‘粘るもの’」を使って言い換えていると考えられる。<sup>14</sup>

#### 5.4. 主名詞句の同定性，定性

*sûŋ* は、第 3 節で見たように、現代においては名詞化形式の用法をすでに失い、関係節化形式にほぼ特化している。そうした関係節化形式に特化した *sûŋ* を含むタイ語の典型的関係節というべき *sûŋ* 関係節は、5.2 節の(26), (28)からわかるように主名詞句から切り離すことができない（強調修飾語句の挿入を許さない、主名詞句との結びつき

---

<sup>14</sup> *thîi* 関係節による補足的かつ主観的修飾は、補文節、同格節による修飾（例：the news that he died）あるいは井上(1976: 191-203, 232-242)の言う「疑似関係節（限定関係節）」（例：ジョンが申し込みを取り消した理由，一行が到着した気配，国連で中共が承認された有様）や「同格名詞句」（例：彼らが無事だったとの知らせ，台風の上陸はどこかとの問い合わせ），寺村(1992: 202)の言う「内容補足的修飾」（例：さんまを焼く匂い，それが正しいという意見），Croft (2001: 348)の言う「名詞句補文(nominal complements)」（例：学生が本を買った事実），堀江・パルデシ(2009: 67)の言う「補足的修飾」（例：雑誌をひもで縛る作業，首相が辞職したニュース）などと重なる特徴があると思われる。

が強い) という特徴を持っている。それはなぜかといえば, 主名詞句と *sûŋ* 関係節の関係は「主題(topic, theme)」(Kuno (1973) <sup>15</sup>) と「評言/解説(comment, rheme)」という相互依存の関係(一方がなくては一方が成り立たないというお互い切り離し不可能な関係)にあるからであろうと筆者は考える。並列の関係にある主名詞句と *thîi* 関係節では, 主名詞句だけを副詞などによって強調的に修飾し, さらに続けて並列的な *thîi* 関係節によって補足的に主名詞句を修飾することが可能である。しかし「主題—評言」という相互依存の関係にある主名詞句と *sûŋ* 関係節では, 主名詞句だけを副詞などによって強調的に修飾し, さらに続けて従属的な *sûŋ* 関係節によって主名詞句を修飾することができないのであろう。

「*ʔaray* ‘何か’」という不定の主名詞句であればほとんどの場合 *thîi* 関係節が続き *sûŋ* 関係節は続きづらいようだ。<sup>16</sup>このことから, *sûŋ* 関係節構文の主名詞句は定である(話し手と聞き手が同一の指示物を同定することが想定されている)ことが伺える。話し手は主名詞句の指示物を定と想定し, その定の指示物(主題として立てたもの)について情報付加的な修飾を加えるために *sûŋ* 関係節を使うのではないかと考えられる。(定の主名詞句に対する)情報付加の機能を持つと言われる非制限関係節に近いといえる。<sup>17</sup>

---

<sup>15</sup> Kuno (1973: 243)は日本語の関係節について次のような仮説を提示した。“[W]hat is relativized in a relative clause is not an ordinary noun phrase, but a noun phrase followed by the thematic particle *wa*.”(「関係節内で関係節化されているものは, 普通の名詞句ではなく, 主題小辞「は」が後続する名詞句(主題化された名詞句)である。)(筆者訳)タイ語の *sûŋ* 関係節構文の意味機能を考察するにあたり, 「日本語の関係節構文の主名詞句には主題性が備わっている」という久野暉氏の考えを参考にした。

<sup>16</sup> 研究会での口頭発表の際に井上和子氏から「主名詞句が *something* や *anything* という意味の場合, タイ語ではどの種類の関係節が使われるのか」という質問を受けた。そうした不定の主名詞句と *sûŋ* 関係節との親和性の低さに気付くことができたのは, この質問による。

<sup>17</sup> 益岡(1995: 150)は「情報付加型の非制限的連体節表現は「主題—解説」の

一方 *thîi* 関係節の場合は, その主名詞句の指示物は(30)のように不定の場合もあれば, (31)のように定の場合もある。<sup>18</sup>

(30) *mii khèək thîi yàak cà? maa hǎa*  
 ある 客 関係 欲する 非現実 来る 訪ねる  
*khun sǎam khon*  
 あなた 3 類別

これからあなたを訪ねたい客が3人いる

(31) *khèək thîi khun cəə mu̯a waan maa hǎa ?iik*  
 客 関係 あなた 会う 昨日 来る 訪ねる 再び  
 昨日あなたが会った客が再び訪ねてきた

主名詞句が不定である(30)の *thîi* 関係節は (不定の主名詞句に対してその指示領域を制限する) 制限関係節でしかあり得ないが, 主名詞句が定である(31)の *thîi* 関係節は (定の主名詞句に対してその指示領域を制限する) 制限関係節でも (定の主名詞句に対して情報を付加する) 非制限関係節でもあり得る。具体的に言い換えれば, (30)の「これからあなたを訪ねたい」は不定の客を制限的に修飾してその不定の客の指示領域を制限しているが, (31)の「昨日あなたが会った」は定の客を制限的に修飾してその定の客の指示領域を制限していると解

---

表現の性格を持ち, 制限的連体節表現はそのような性格は持たない」と主張する。その主張の根拠として, 「主名詞が主題の性格を有するには, その主名詞が連体節の叙述とは独立にその指示対象が同定可能でなければならない」が, その通り, 「非制限的連体節表現の主名詞は, 一般の主題の場合と同様に, その名詞のみによってその指示対象は同定可能である」ことを挙げている。

<sup>18</sup> (30), (31)は峰岸(2006: 117)から引用した。ただし逐語訳は筆者による。

タイ語では, 存在動詞「*mii* ‘ある’」の後ろに生起する名詞句は不定かつ特定のな新情報の読みとなる (Ekniyom (1982: 119-120))。したがって(30)の「*mii* ‘ある’」の後ろの「*khèək* ‘客’」は不定かつ特定のな客を表している。

積することもできるし, 定の客を非制限的に修飾してその定の客についての情報を付加していると解釈することもできる, ということである。<sup>19</sup>つまり thîi 関係節の場合, 制限関係節か非制限関係節かという区分はほとんど関係がないようである。そうであるとすれば, thîi 関係節は制限関係節であり, sūŋ 関係節は非制限関係節であるという先行研究に散見される定言的な分類は不適切な分類であると言わざるを得ない。<sup>20</sup>

### 5.5. 主名詞句の特定性

thîi 関係節構文の主名詞句を特徴付けているのは, その「特定性」であると筆者は考える。特定性の概念に関与するのはあくまでも話し手自身の知識状態や意図性である。話し手があるものを別のものと厳密に区別して特別のものとして指示しようとするとき, 特定性の意味が生じる。特定性の概念には聞き手の知識状態 (聞き手が指示物を同定できるかどうか) は関係しない。前節で見たように, thîi 関係節の主名詞句は「(聞き手が指示物を同定できる) 定」の場合も「(聞き手が指示物を同定できない) 不定」の場合もあるのはそのためであろう。

5.3 節で具体的に (29) に即して説明したように, 話し手が意図した特定の指示物 (話し手が特定のな実在物として認定し指示するもの)

---

<sup>19</sup> これに関連して, 井上 (1976: 167-168) は「唯一の指示を持った名詞句でも, 関係節の意味によって, 制限, 非制限の解釈が成り立つ」と指摘する。例えば, 固有名詞 (唯一指示を持った名詞) は通常, 「地球からもっとも近い月」の「月」のように非制限用法的に解釈されるが, 「住みよい地球」の「地球」のように普通名詞として扱われ制限用法的に解釈されることもある。

<sup>20</sup> チャウエンギジワニッシュ (2000) によると, 非制限的修飾 (情報付加) 機能を持つとされるタイ語の関係節は, 実際は①「情報付加」と②「場面限定 (眼前描写)」の機能を持ち, 前者の機能はさらに①-1「名詞句への情報付加」, ①-2「無題の述定的装定」 (益岡 1995: 145, 147), ①-3「提示的連体構文」の3つに分類できるという。①-1と①-2には普通 sūŋ が使われるが, 強調されるときには thîi が使われ, ①-3と②には thîi だけが使われるという。

の顕著な特徴 (特筆性) を表現したいときにタイ語話者は *thîi* 関係節 (並列の同格節による補足的, 主観的修飾) を使うのではなかろうか。それが本稿の考察の結果得られた筆者の仮説である。

## 6. まとめ

本稿は, 「*thîi* 関係節は主名詞句を制限的に修飾し (指示領域を制限し), *sûŋ* 関係節は主名詞句を非制限的に修飾する (情報を付加する)」という先行研究に散見される見方を再考し, より基本的な分析概念を使ってタイ語の主要な3種類の関係節構文の意味機能を再定義しようと試みた。本稿の分析によって導かれた仮説を以下に要約する。

① *thîi* 関係節は主名詞句を制限的に修飾する (指示領域を制限する) こともあれば, 非制限的に修飾する (情報を付加する) こともある。補足的言い換えに似ており, その特徴は, 話し手が意図した特定の指示物の顕著な特徴 (特筆性) を表現するところにある。*thîi* 関係節構文とは, 「特定名詞句」と「特筆的内容を添える名詞句」という2つの構成素が並列関係で結ばれた構文であると定義できる。

② *sûŋ* 関係節は主名詞句を非制限的に修飾する (情報を付加する)。タイ語の典型的関係節であり, その特徴は, 主名詞句を主題とし, その主題について評言を添えるところにある。*sûŋ* 関係節構文とは, 「主題名詞句」と「評言補文節」という2つの構成素が弱い従属関係で結ばれた構文であると定義できる。

③ 裸の関係節は複合名詞句の構成素と同様, 常に非定形で, 話し手によるアスペクト解釈やモダリティ解釈を明示化できない。かなり慣用化され固定化された紋切り型の概念を表すのに適している。

(32) khruu thîi chán rúu càk

先生 関係 私 知っている

私 知っている先生 (先生, 私が知っているもの)

(33) khruu sûŋ chán rúu càk

先生 関係 私 知っている

私 知っている先生

(34) #khruu ∅ chán rúu càk

先生 私 知っている

(意図する意味) 私 知っている先生

本稿の仮説に従えば, (32)~(34)の異同は次のように説明される。(32)の「先生」は話し手にとって特定の存在であり, 「私 知っている」という特筆すべき特徴を持っていることが thîi 関係節の修飾からわかる。(33)の「先生」は話し手と聞き手が同定できる存在で, sûŋ 関係節の修飾によってその「先生」について「私 知っている」という情報が付け加えられている。(34)は「先生は(先生について言えば)私 知っている」という叙述形式として解釈され, 「私 知っている先生」という連体修飾の意味には解釈されない。その理由として, 1つには「私 知っている」という修飾内容自体が紋切り型の概念を表す裸の関係節と適合しないこと, もう1つには, 裸の関係節構文が成立するためには関係節の中に主語名詞句があってはならない(主名詞句と関係節内の主語名詞句の2つの名詞句が隣接してはならない)こと, が挙げられる。

今後は, 大規模タイ語コーパスから関係節構文の実際の用例を多数収集して詳しい談話分析を行い, これらの仮説の妥当性を検討したい。



< 参照文献 >

- Bisang, Walter (1993) "Classifiers, quantifiers and class nouns in Hmong" *Studies in Language* 17.1, 1-51.
- Bisang, Walter (1996) "Areal Typology and Grammaticalization: Processes of Grammaticalization Based on Nouns and Verbs in East and Mainland South East Asian Languages," *Studies in Language* 20.3, 519-597.
- Bisang, Walter (2007) "Categories that make finiteness: Discreteness from a functional perspective and some of its repercussions," *Finiteness*, ed. by Irina Nikolaeva, 115-137, Oxford University Press, Oxford.
- Bisang, Walter (2009) "On the evolution of complexity: Sometimes less is more in East and mainland Southeast Asia," *Language Complexity as an Evolving Variable*, ed. by Geoffrey Sampson, David Gil and Peter Trudgill, 34-49, Oxford University Press, Oxford.
- Chafe, Wallace L. (1976) "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view," *Subject and Topic*, ed. by Charles N. Li, 25-55, Academic Press, New York.
- チャウエンギジワニッシュュ, ソムキヤット (2000) 「日本語・タイ語における「非制限」の連体修飾節」『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』3, 15-31.
- チャウエンギジワニッシュュ, ソムキヤット (2002) 『「限定」「非限定」の連体修飾節の研究—日本語とタイ語の対照—』博士論文, 筑波大学.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Ekniyom, Peansiri (1971) *Relative Clauses in Thai*, Master's thesis, University of Washington.
- Ekniyom, Peansiri (1982) *A Study of Informational Structuring in Thai Sentences*, Doctoral dissertation, University of Hawaii.
- Kitsombat, Pornthi (1981) *The Usage of /thî/, /sûŋ/ and /ʔan/*, Master's thesis, Chulalongkorn University.
- Fox, Barbara A. and Sandra A. Thompson (2007) "Relative clauses in English conversation: Relativizers, frequency, and the notion of construction" *Studies in Language* 31.2, 293-326.
- Givón, Talmy (1973) "Opacity and Reference in Language: An Inquiry into the Role of Modalities," *Syntax and Semantics* 2, ed. by John Kimball, 95-122, Seminer Press, New York.

- Givón, Talmy (1978) “Definiteness and referentiality,” *Universals of Human Language, Vol. 4: Syntax*, ed. by Joseph H. Greenberg, 291-330, Stanford University Press, Stanford.
- Givón, Talmy (1990) *Syntax: A Functional-Typological Introduction, Volume 2*, John Benjamins, Amsterdam.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 堀江薫・パルデシ, プラシヤント(2009)『言語のタイポロジー: 認知類型論のアプローチ』研究社, 東京.
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店, 東京.
- Ionin, Tania (2006) “This is definitely specific: Specificity and definiteness in article systems” *Natural Language Semantics* 14, 175-234.
- Keenan, Edward L. (1985) “Relative clauses,” *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 2: Complex Constructions*, ed. by Timothy Shopen, 141-170, Cambridge University Press, Cambridge.
- Keenan, Edward and Bernard Comrie (1977) “Noun phrases accessibility hierarchy and universal grammar” *Linguistic Inquiry* 8, 63-99.
- Kullavanijaya, Pranee (2006) “Attributive clause constructions: Relative clauses and complement clauses,” *Controversial Constructions in Thai Grammar: Relative Clause Constructions, Complement Clause Constructions, Serial Verb Constructions, and Passive Constructions*, ed. by Amara Prasithrathsint, 7-65, Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Kullavanijaya, Pranee (2008) “A historical study of /thîi/ in Thai,” *The Thai-Kadai Languages*, ed. by Anthony V. N. Diller et al., 445-467, Routledge, London.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge.
- Kuno, Susumu and Preeya Wongkhomthong (1981) “Relative clauses in Thai” *Studies in Language* 5.2, 195-226.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Lehmann, Christian (1986) “On the typology of relative clauses” *Linguistics* 24, 663-680.
- Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 益岡隆志(1995)「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志・野田尚志・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』139-153. くろしお出版, 東京.

- 三上直光(1999)「タイ語における連結形式と意味の関係について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』31, 209-223.
- 峰岸真琴(2006)「タイ語の名詞句構造」東南アジア諸言語研究会(編)『東南アジア大陸諸言語の名詞句構造』89-118. 慶應義塾大学言語文化研究所.
- Prompapakorn, Praparatt (1996) *Variation and Change in Relative Clauses in Thai during the Ratanakosin Period*, Master's thesis, Chulalongkorn University.
- Savetamalya, Saranya (1999) "Verbal relative clauses as adnominal modifiers in Thai" *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the 4<sup>th</sup> International Symposium on Languages and Linguistics, Vol. 2, January 8-10, 1996*, ed. by Institute of Language and Culture for Rural Development, Mahidol University at Salaya, Thailand, 627-646.
- Shibatani, Masayoshi (2009) "Elements of complex structures, where recursion isn't: The case of relativisation," *Syntactic Complexity: Diachrony, Acquisition, Neuro-Cognition, Evolution*, ed. by Talmy Givón and Masayoshi Shibatani, 163-198, John Benjamins, Amsterdam.
- Sindhvananda, Kanchana (1970) *The Verb in Modern Thai*, Ph.D. dissertation, Georgetown University.
- Singnoi, Unchalee (2000) *Nominal Constructions in Thai*, Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- Sornhiran, Pasinee (1978) *A Transformational Study of Relative Clauses in Thai*, Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』くろしお出版, 東京.
- Yaowapat, Natchanan and Amara Prasithrathsint (2009) "A typology of relative clauses in mainland Southeast Asian languages" *Mon-Khmer Studies* 38, 1-23.